

碩心

社団法人 日本詩吟学院 岳風会 認可
神奈川 碩心会 発行

11年 逗葉大 (合)	2月現在 地区計	会員数 132名 196名 33名 361名	11年 2月 (319号)	発行者 千 葉 岳 関	編集者 白 井 岳 麗
-------------------	-------------	------------------------------------	---------------	-------------	-------------

行事予定

○春季審査会

日時・3月14日(日)を次の日程に変更

3月27日(土)

会場・逗子図書館

本年より県本部の方針として、平成11年度12月までに70才になる方が受審する場合、本人の希望により教本を見て吟詠することも可能になりました。

○神奈川県本部事業

日時・3月28日 青少年育成の日

日時・4月4日 総伝会(総会)

○皆伝会会場変更のお知らせ

日時・5月9日(日)

会場・逗子会館

平成11年

碩心会初吟会

企画部 田中明 岳

1月10日(日)、晴れ渡った空は雲一つなく、海を見れば海面が何色にも変化し、その美しさに見とれる程でした。

今年はずっと晴天に恵まれ(昨年は大雪でした)

逗子会館に於ける初吟会の出席者は二百十九名の多数にのびりました。

担当支部の方々は早くから準備にかかりましたので、ゆとりができた時刻の10時松井正岳先生の司会で始まり、開会の言葉を副会長の加藤岳洵先生、千葉岳関会長の挨拶に続き大合吟「碩心会の詩」、村田岳瀨先生そして教場別合吟、指導者合吟、招待者挨拶と吟詠を第二地区長加藤岳心先生、県本部長立平岳昇先生方の力強い吟詠に続いて、相談役以上の吟詠、そして高橋之香佳香会会長、白井紅舟会会長、中村京愛会会長、三題のあてやかな祝舞で一部を終了。

乾杯を顧問加藤岳相先生の発声で行い、食事をしながらの団欒となりました。

二部の演芸に入り、初吟会の準備そして余興のお世話の担当支部「一色、上山口、下山口、唐木山、東伏見、吟甫、秀吟」七支部の紹介、そして柔の踊りで始まり、民謡、カラオケ、飛入りと予定時間ぎりぎりまで楽しみ時の過ぎ行くことを惜しみながら初吟会はお開きとなりました。

担当支部の皆さんには11月から1月まで、打合せと準備に長い間お骨折り頂きありがとうございました。

堀内支部35周年吟道大会を終えて

堀内支部副支部長 根岸啓岳

昨年12月13日長柄会館に於いて、堀内支部35周年吟道大会が行なわれました。

当日は晴天に恵まれ、師走のお忙がしい中にもかかわらず、千葉岳閣会長を始め各指導者の先生方、各支部長の皆様に多数ご出席いただき、誠にありがとうございました。

加藤美岳さんの開会の言葉に始まり、会員吟詠、祝舞、そしてご招待の先生方の吟に移り、お一人お一人の個性ある素晴らしい吟詠を拝聴することができました。

また式典では母の根岸岳静90才が受ける、高齢者表彰を先生方のご配慮のお陰で、母が直接壇上で頂くことができました、大層喜んでおりました。普段お目にかかれないう先生方にお会いできたことが嬉しく、記念写真を撮り、思い出深い一日になりました。

当日会場で皆様にお受取りいただきました千代紙細工の爪楊枝入れは、岳静の手作りの品でございます。ひとりで作り置きしては皆様に差し上げることが喜びとして数多く揃えたものでございます。

中国漢字路上視察の旅

東伏見支部 森合敬山

中国各地の観光旅行に出て、いつも驚くのは看板文字、スローガンの氾濫。しかも文字文化発祥の地とされている国の、何という文字の略字化、簡体字化。それは単なる略字という程度をこえた苛烈さで、私はアア文化大革命は文字文化では、まだまだ続いているナ象形文字の字源もヘツタクレもないナと、パスの車窓から慨嘆しきりである。(その時には勿論、わが国のケバケバしい看板の類は頭がない。)

漢字は台湾が昔からの繁体字を用いているのに対し、中国は革命政権後大幅に略字化を採用していることは知っていた。また日本と中国では同文同種の漢字を使っていることも昔中学の漢文の授業で習って以来知っていた。しかし論語、孟子、唐宋詩、唐宋八家文など格調高い中国古典の美文、名詩に憧れをもつて親しんできた者からは中国の現代の文字は何ともムチャクチャではないかと思えるのである。

中国旅行の最初の頃、店の看板に「卡拉OK」

と出ているのが日本のカラオケのことであると知って驚ろいた。以来何度かの中国旅行で駅や自由市場や名所名蹟をめぐる途上、所謂「路上視察者」となって店の看板や、垂れ幕のスローガンなど、目につく文字は何という意味で、そのもとの字体は何であるか、ウオツチすることが病膏盲に入り、また楽しみともなつた。そんな私を知ってか知らずか、今回の旅(十月に邯鄲、泰山、孔子の曲阜を廻つて来た)に隣席のTさんから「森合さん、あの焼鳥の串のような字、丰は何の略字ですか」と聞かれキョトンとしてしまった。たしか字は丰姿と書いてあつた。ヤキトリの字ねえー全く見当がつかない。そのうち前席のMさんが篤学の士で、辞典を持っているのを思い出し、早速聞いてみた。それは豊の字ですよとのこと。そう言えば昔の豊臣秀吉の字に使われていた豊の字は頭の方にヤキトリが二本並んだ、むずかしい字であつた。(豊)

とにかく中国の旅ではバスの窓から見える漢字のナゾ解きを楽しみながら、民情風俗、政治経済のスローガンを眺め、眠気さましにつとめているのである。

平成 1 1 年 碩 心 会 初 吟 会 決 算 書

出席者数 : 会員 = 217名 招待者 = 2名 計 219名				
収 入 の 部		支 出 の 部		
摘 要	金 額	摘 要	金 額	備 考
会 費 3,000円×217名=	651,000円	返子会館関係	225,750円	
本部会計補助	70,000円	会 場 費 210,000円		
指導者会より	30,000円	カラオケ 5,000円		
寄 付	28,000円	消 費 税 10,750円		
新幹伝者(8名) 8,000円		お弁当代 1,500円×219 =	328,500円	スズキヤ
立平 岳昇先生 10,000円		飲み物・つまみ等	165,000円	笠原商店
加藤 岳心先生 10,000円		日本酒 8,280円		
笠原商店 清酒		ビール 36,200円		
雑収入	3,521円	つまみ 65,700円		
ビール返品分 2,016円		みかん代 21,000円		
ビール販売卸代 1,505円		ウーロン茶他 26,959円		
		消 費 税 6,861円		
		余興参加賞	8,442円	
		事務費・会議費等	29,330円	
		名札・式次第等代 4,000円		
		担当支部打合せ 4,526円		
		会議費(担当支部・企画部) 8,000円		
		プログラム等コピー代 5,860円		
		通信連絡費 3,160円		
		消耗品その他 3,784円		
		お車代(招待者)	20,000円	
収入合計	782,521円	支出合計	777,022円	
		残 金 (次期繰越)	5,499 円	

企画部長 内山 俊岳 印
 ” 副部長 田中 明岳 印
 ” 副部長 星野 輝岳 印

山岡鉄舟の人柄について

「晴れてよし、曇りてもよし 富士の山もとの姿は かわらざりけり」の歌で知られている鉄舟の人柄について書かれた文を読んで、感銘を受けましたのでご紹介します。

山岡鉄舟を一躍有名にしたのは、身の危険を冒して駿府へ赴き、江戸城総攻撃をしようとする西郷隆盛を説いて、無血開城への突破口を切り開いたことであろう。「チヨット行つてくるぞ」と言い残して出たそうので、後で重要な使命を負って出掛けたことを知った妻は大変心配して神仏に祈ったという。

後日西郷は鉄舟を評して海舟に「流石徳川公だけあってエライ宝をお持ちだ。あの人はどうの、こうのと言葉では言い尽せぬが、何分にも腑の脱けた人でござる。命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬといったような始末に困る人ですが、お互いに腹を開けて共に天下の大事を誓いあうわけにはまいりません」と。

鉄舟はある夜、出先からの帰りに人力車に乗った。車夫は老境とみえ、加えて降雪の為車が思うように進まず困憊してきた。鉄舟は

老車夫を不憫に思い、車から飛び下り「あなたはすでに老境に入っているのに尚も人に乗せている。自分は壮健であるため車に乗っていることは忍びない。試みにあなたが乗ってみよ」と断る車夫を抱き上げて車に乗せ、自邸にはいり酒食を与えたと云う。老車夫は感泣して去り、後に「四谷に菩薩のような旦那がいる」と人に語っていたという。

剣、禅、書の分野でも鉄舟は大きな足跡を残して明治21年（一八八八）7月19日、五十三才の生涯を閉じた。

吉田松陰等が処刑された伝馬町刑場跡地にある地藏尊の台座の文字や、上野の彰義隊戦士の墓石の文字も鉄舟の筆と云う。

7月22日に葬儀が行なわれ、会葬者は大雨の中五千人にも及び、乞食までが葬儀に加わっていたと云う。

生前に親交のあった清水次郎長は、子分百余人をひきつれ旅姿で会葬して異彩を放ったと云う。

辞世の句に

「腹張りて 苦しき中に 明鳥」
がある。

秋元 岳 梁 寄稿

退会

205 高橋俊風（真澄） 489 大場嘉江（堀内D）

俳句

岩崎 岳 恵

水笥の無音の世界零下五度

石渡 岳 桂

山路来て光る海見ゆ路の臺

佐久間 爽 岳

霜晴れや神事の太鼓鳴り出づる

寺 脇 宇 岳

長寿会酒熱くして若返る

三 壁 照 岳

船宿の春の障子や波明り

編集後記

春の陽さしの暖かさに誘われて

堀内会館の庭の白梅、寒桜が一度に咲きほこり、甘い香りをただよわせています。

陽だまりの一部屋で月報の編集をして、終つてからいただく一服のお茶のおいしき。

楽しい笑いの余韻を残してそれぞれ家路につきました。

編集部